

「あるクラスで」

とある中学校の昼休み、ある一年生の教室からはこんな会話が聞こえてきた。

「幸夫のやつゆるせんと思わん。そうじ時間はいつも話してばかりで何もしないよ。じつと見てたら、なに見てんだよだつて、感じ悪いよね。それで、先生の足音が聞こえてきたら、急にほつきなんかもつてさ、一生懸命やってみて感で態度が変わるんよ。いつもそうじのときの幸夫の態度はこうなんよ。私、頭に来た。もう気にするのやめた。無視、無視！」

大きな声でしゃべっているのは結香である。

かおりは、その言葉に同調するように言った。

「この前の学活の時間だつてさ、授業前に二分前着席ができていないことについて、クラスでどうしたらいいか話し合ったときだつて、ゆるせないと思う。」

「そうそう、あの発言はむかついたよね。」

結香がすかさず言った。

かおりは続けた。

「学習委員がもつと注意したらいいと思いますだつて。自分がいちばんさわいでるのに、よくもそんなことが言えるよね。」

こんな調子で、幸夫に対する会話で盛り上がりつつあった。

やがて、五校時が始まる二分前になった。でも、結香達は話をやめて着席する気配はなかった。結香達のグループは、五校時の授業の準備が遅れて、先生に注意されることがしばしばであった。注意されるといつも「トイレに行つて遅れまし」などとそれらしい言い訳で逃げるのである。

かおりは五校時の準備をしながら、平気で人の陰口を言っている自分が少しいやになった。でも、幸夫が悪いんだからしかたないよと割り切るかおりであった。そのうち、クラスのいたるところで、幸夫に対する陰口が聞かれるようになった。そして、次第にクラスの多くの人が、幸夫を無視するようになり始めていた。

学級では、幸夫に対してだけではなく、知らず知らずのうちに他の人に対しても陰口を言い合うようになつていった。

授業中には、「……ってむかつくね……」といった内容の小さな紙切れがこつそりと回ってくることもしばしばであった。

昼休みの時間はあいかわらず結香のまわりに五、六人のグループができてい

た。自分たちが気に入らないところをさがしては、人の悪口を言い合う日々が続いていた。かおりも初めのうちは会話に参加していたが、やがて、何ともいえない気持ちになり、会話を聞いてばかりいるようになった。

クラスの中には、結香のグループに対していい思いを抱いている人はいなかった。でも、結香に何を言われるか分からないので、結香達に意見する人はだれもいなかった。

幸夫はクラスで孤立するようになり、明るかったクラスの雰囲気も、いつしか、暗い雰囲気になつていった。クラスみんなはお互いに、自分が陰口を言われるかもしれないと、いつもびくびくしていた。

学級の話し合いでは、本音で意見を言い合うことはなく、いつもまわりの反応を気にしながら発言するようになっていった。

ある日、かおりは部活が終わつて帰ろうとしていたところ、忘れ物を思い出して教室に取り戻つたことがあった。そのとき、クラスではあまり目立たないひとみが、だれもない教室のそうじをしていた。

かおりはひとみに「なにやってんの」と聞いた。

ひとみはだれもないと思つていたのにいきなり声をかけられ、少しびっくりした表情で答えた。

「教室の前が少しきたなかつたからきれいにしようと思つて。みんなが朝、教室に入ったとき汚れていたらいやな気持ちになるかなあと思つたから……」

かおりはそれを聞いて何も言葉が浮かばず逃げるようにしてその場から離れた。帰る途中、かおりはなぜか自分が腹立たしく思えて仕方なかった。なぜこんな気持ちになるのか自分ではよくわからないかおりだった。

クラスの黒板の上には、学級目標が飾つてある。

クラスみんなで長い時間話し合つて決めた目標だ。

—— 信じ合える仲間、助け合えるクラス ——

かおりは学級目標をじつと見つめながら思つた。

このままではいけない。学級が壊れてしまう。何とかしなければ……でも、どうしよう……